

# 第7回ステークホルダー・ダイアログご報告

第7回ステークホルダー・ダイアログをNGOジャパン・フォー・サステナビリティの運営のもと開催しました。有識者の方々から持続可能な社会に向けた多面的な意見をいただき、議論しました。

本年7回目のダイアログでは、時間・空間のスパンがかなり広がった議論が行われました。第1部では今まで竹中さんが温めてこられた2050年という長期のビジョンが披露され、ステークホルダーから大きな反応がありました。第2部では改めてCSRIについての議論が活発になされました。いずれのテーマも、コミュニケーションが今後も非常に大切であり、そのためにはメッセージを広く社会にどう発信していくかが鍵になると思われます。

2010年10月8日  
ジャパン・フォー・サステナビリティ  
共同代表 多田博之(ファシリテーター)



## — Index —

第1部 2050年を目指す竹中の想い  
～ 環境コンセプトの展開 ～

第2部 建築を通じた地域社会とひととの関わり  
～ CSRの視点を含めて ～

第7回 ステークホルダー・ダイアログを開催して

実施日: 2010年10月8日  
場所: 竹中工務店東京本店

[ 詳細プロフィールは[こちら](#) ]

## ■ 参加いただいたステークホルダーの皆様

※本文中は敬称を省略しました。



### 堀越 哲美氏

名古屋工業大学大学院工学研究科  
産業戦略工学専攻教授/都市環境デザイナー



### 野村 浩一氏

富士ゼロックス株式会社  
CSR 部企画グループ グループ長



### 諏訪 正晃氏

個人として参加  
(江東区役所土木部 水辺と緑の課職員)



### 木村 麻紀氏

ビジネス情報誌『オルタナ』副編集長、  
ジャーナリスト



ダイアログに先立ち、当社東京本店を見学される有識者の方々。

## ■ 竹中工務店からの出席者

- |                 |                  |                |
|-----------------|------------------|----------------|
| ■ 岡田正徳(常務執行役員)  | ■ 村上 正(執行役員企画室長) | ■ 川原田 稔(地球環境室) |
| ■ 三輪 隆(技術研究所)   | ■ 高井啓明(設計本部)     | ■ 松隈 章(設計本部)   |
| ■ 小平純子(東京本店設計部) | ■ 長谷川 淳(大阪本店設計部) |                |

### <オブザーバー>

- |                 |             |                |
|-----------------|-------------|----------------|
| ■ 鈴木頼多(企画室)     | ■ 中出 昇(広報部) | ■ 上原茂男(TQM推進室) |
| ■ 佐々木良和(TQM推進室) | ■ 高橋裕幸(人事室) | ■ 北沢信二(社員組合)   |

# 第1部 2050年を目指す竹中の想い

## ～環境コンセプトの展開～



### 村上

竹中工務店のステークホルダー・ダイアログも迎えて7回目の開催になります。本年は6月の環境月間にあわせ、『環境コンセプトブック～2050年を目指して～』を発行し、サステナブル(持続可能な)社会の具現化への取り組みを加速する決意を表明しました。また、地域社会やひととの関わりもCSR(企業の社会的責任)の一つとして重要な取り組みと考え推進してきました。そういったことをテーマに、ステークホルダーの皆さまの目から見てどうなのか、こうすればどうかというところを議論できれば幸いです。

(『環境コンセプトブック～2050年を目指して～』について竹中工務店よりプレゼンテーションを行いました。)

### 多田

2050年というかなり長いスパンの中で、環境への取り組みをどうやっていくかというコンセプトやロードマップが、今回かなり明確に示されたというのが1つです。それから、ステークホルダー・エンゲージメントと言ったほうがいいのかもしれませんが、従業員の方には説明会やeラーニングを行うということですが、こういうブックレットを通して社会とどうコミュニケーションしていくかがポイントになるかと考えます。

### 諏訪

2050年を目標にした中での**一定期間ごと**の見直しというのは、どうとらえていくのでしょうか。

また、ボランティアやNPO、建築主さん、出来た建物の近くに住んでいる方とのつながり方。それはまちづくりにつながっていくものだと思いますが、こちらについての考えはどうでしょうか。

### 高井

当然、今からやっていくべき短期の課題は、2050年というロングスパンのロードマップで示した目標と合致していくように作っていかねばなりません。バックキャストिंगで、まず2050年のあるべき姿をわれわれなりに検討した上で、5年、10年というところでの短期の目標に置き直していくということを、現在進めています。



[『環境コンセプトブック ～2050年を目指して～』](#)





### 小平

建物は周辺の人々にとって共有資産ともいえます。最近携わったプロジェクトで、都市部で本社と研究所が一体となった作品を設計しました。周辺環境との調和を図るために、建物を上階に行くほどセットバック(後退)させ、できるだけ威圧感がないようにするとともに可能な限り屋上緑化を取り入れました。また、環境への配慮として日射制御に外部可動ルーバーを設け、セキュリティを高めると同時に視線を制御するといった工夫もしています。

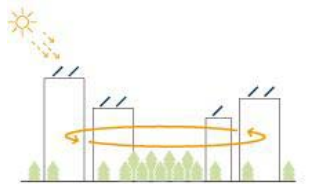


### 野村

まず、2050年に向けたコンセプトを作って、どう今の経営の中に内在させていくか。例えば、どの段階から、**キー・パフォーマンス・インディケーター(主要な評価の指標)**みたいなものをつくって進捗度を測ろうとされているのか。

2点目は、環境問題にはエネルギー、CO2以外のところにも、**資源**とか、**生物多様性**とかがありますが、**そのあたりをどう管理されようとしているのかを教えてください。**

また、貴社が手がけられた建築物だけではなくて、まち全体でカーボンニュートラルを目指すことは素晴らしいコンセプトだと思いますが、そうなった時に、自社だけではなくて、様々な**アライアンス(企業連携)**が必要になってくると思います。例えば交通機関や、センシング技術などが絡んできます。世の中のガイドラインが必要だとか、もっと政府の強力な指導が必要だとか。このあたりも大事なポイントになると思いますが、いかがお考えでしょうか。



カーボンニュートラルな都市  
オフサイト(敷地の外)への措置も含めて、都市・地域のカーボンニュートラル化を図る(再生可能エネルギーの相互融通、カーボンクレジット等)

### 川原田

『環境コンセプトブック』のロードマップには大枠の指標しか表現していないのですが、建物の運用段階のところまで踏み込んでやっていくために、具体的にデータを取っていくことを立案しています。そこでロードマップをフォローしていく計画です。

### 三輪

CO2以外の部分については、まだ明確な長期目標というところまで議論を深めていないというのが実態です。生物多様性については個別具体のプロジェクトベースで考え、トップランナー的な先進事例を、どれだけ提案し、作り込んでいくかということだと思います。

### 高井

2年前に洞爺湖サミットで、国際メディアセンターという建物を施工させていただきました。この建物では、リユース材、リサイクル材の割合が99%ということが達成できました。ただ、50年、100年もつ建物で、そのようなリユース率、リサイクル率が達成できるかというと、まだハードルは高いのが実態です。資源循環における指標作りは課題として位置づけています。

3点目の、カーボンニュートラルを達成していくに当たってのアライアンスの必要性というのは、ご指摘の通りだと思います。



北海道洞爺湖サミット 国際メディアセンター



## 堀越

名古屋は今年開府400年です。では開府500年となる100年後はどうだろうということで、学生たちに「100年後の名古屋を描け」というのをやらせましたが、100年後って非常に難しい。ところが、竹中さんの場合、40年後はどうかと言うと、イメージできているわけですね。比較的具体的に書かれているのはすごいなと思いました。ただ、一般の方たちは、ゼロカーボン、カーボンマイナスは分かりますが、その次のカーボンニュートラルの説明はすごく難しいと思います。これをもう少し**わかりやすく**、市民の方たちにやっていただくとありがたいなと思います。

もう1つ、「住み手が健康になり」というところから始まって、「感性や創造性がある」と人の方から入ってきて、それから自然、エネルギーと入ってくるところの並び方は、非常に好感が持てました。感性、新しいライフスタイルを考える上で、**住まい手や使い手とどのような手法で向かい合うのか**。ここがすごく大事だと思います。建物をつくったりメンテナンスをやっていく、外から来られる方たちや見る人たちとの関係、広い意味での環境学習をどうしていくのかというところが非常に大事だろうと思います。実はこれは、環境を大事にするだけではなくて、**建築を造りたい、建築が好きな子どもたち**を育てないとよくないと思います。

最後に、新しい価値、持続性の再生というのは、自然だけではなくて、文化とか継承の中にも潜在力があると思います。それを少し「見える化」していただいて、使っていくことが必要かなと思います。



## 松隈

建築が好きな子どもを育てるということについてですが、GALLERY A4(ギャラリー エー クワッド)の活動がその一例だと思います。GALLERY A4というのは、「建築を愉(たの)しむ」というコンセプトを付けているように、来られた方に建築を愉しんでいただく工夫をしています。子どもから大人も含めて建築を理解する方々を増やすことによって、50年、100年先まで、建築も分かる、環境に理解のある人を育てるということに少しでも貢献しようということで取り組んでいます。

[GALLERY A4 \(ギャラリー エー クワッド\)](#)  
「リサ・ヴォート写真展」

## 新しいライフスタイルの実現

### 木村

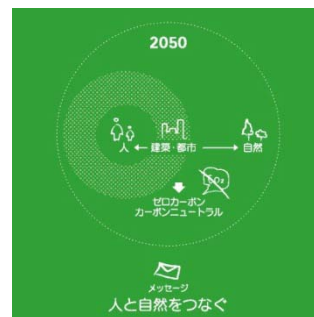
私事ですが、あと半月ほどで2歳になる子どもがいます。住まいや空間や場というのは、御社が様々な角度から取り組まれている領域ですね。それらが心地よいということが、人間の**幸せな人生のベース**になるというのを、改めて実感しています。子どもが入る幼稚園、近所の公民館とか、いろいろな場面が想定されますけれども、そういったものが心地よいということはどんなことなのかと考えてみたときに、それは**自然や人に対して開かれた空間、開かれた場**なのではないかというのを、最近考えています。

昨今色々な場で起きていることの原因を考えてみますと、人に対しても自然に対しても閉じられているからではないかと思えます。ですので、竹中さんの、人や自然に対して、どういった開かれたコミュニティをつくっていけるのかというチャレンジを、ぜひ見せていただきたいです。

これからの人間にとって心地よい空間について、2つキーワードを挙げさせていただきます。それは、**自給自足思考と共同体思考**。自給自足というのは、自然エネルギーですとか食糧ですとか、いろんな形で、できるだけ自前でつくり上げていこうという試みかと思われれます。もう1つは共同体思考ということで、現在の人の住まいですとか、働き方のありようとは、ちょっと対局にあるような開かれた住まい方、あるいは働き方といったものがどういうものなのかというのを考えていくことではないかと思っています。こうした前提で、例えばどんな空間で、どんな素材を用いてモノづくりをするということをイメージされているのか、お聞かせ下さい。また、人間にとって気持ちのいい空間をつくり上げる要素として、様々な**自然素材**、その供給元としての生態系の維持が今後、企業の生物多様性への取り組みのキーではないかと認識しているところ です。

### 高井

最初の「開かれた」というお話ですが、私どもの感覚としてもそういう機会を考えながら作っています。コンセプト図にありますように、建築が自然に対してもっと開かれていく、同化していくということが大切だと思っています。そして、すごくお互いのコミュニケーションが活発になるとか、ぶらぶら歩いていくと、何となく頭の中が整理されてすっきりしてくるとか、そういういろんな場があって、そういうものを組み合わせて、もっと建築空間を豊かにできないか、というようなことを考えています。



コンセプト図



## 長谷川

人それぞれ個性がありますので、五感に働きかけるということ、設計の1つ、数値化以外の目標に掲げて、設計の中に取り込もうという活動をしています。

自然素材に関して一例を挙げますと、大阪信愛女学院チャペルがあります。ほとんどすべての素材を自然素材だけで仕上げた建築です。環境負荷を抑えながら、人の五感に働きかける仕掛けをふんだんに取り入れています。周辺環境に溶け込むような高さを抑えた外壁にはレンガを、内部には木や珪藻土(けいそうど)などが使われています。



大阪信愛女学院チャペル  
左:建物外観 / 右:聖堂

## 木村

コンセプトブックを一般の人が読んだ場合、ちょっとイメージが湧きにくいのではないかと、私自身も思ったところでした。パッシブ建築ですとか、いろいろな専門用語がありますけれども、実際それがどういう**自然現象**を活かしながら可能になるのか。東京本店を見学させていただいた際、運河上を流れる風の方向を活かして建物内の通風に役立っているとおっしゃっていましたが、そういう形で記述いただけると、大変分かりやすい。例えば地域の方々、子どもたちへの環境教育といったような側面で作るときは、皆さんが日ごろ色々な形で生のディスカッションをしている際の内容をより活かしていくようなスタイルを志向されたほうがいいのではないかと思います。どちらかと言うと、内部の方よりも、外部のファシリテーターの方などがいる空間の中で、**お話を引き出ししてもらいながら出てきたものをアウトプットとして出していく**方が、伝わりやすいことがよくあります。



竹中工務店 東京本店

## レポートの活用と名称に込めた想い

### 野村

当社もサステナビリティ(持続可能性)レポートを作っていますが、当社の営業も最初からCSRに関心があったかというところではありませんでした。ただ、お客様がご覧になって、「こんなことやっているの。いいことやっているよね」とか言われると、だんだん自分でも改めて読んでみる場所があります。ですから、ぜひ**社員を通じて**、お客様だったり、取引業者さんだったり、そういった所に配られるのを推進されるといいでしょう。

### 川原田

サステナビリティレポートの話をして、社員一人ひとりが理解をして、そこから外に対して力をつけてという、私たちもまさにその通りだと思います。日頃考えていることですが、非常に意を強くしました。ところで、私どもは報告書を竹中esレポートという言い方をしていますが、御社の場合はサステナビリティレポートと呼ばれています。一般にはCSRレポートというネーミングが多い中で、理由を教えてください。



FUJI XEROX  
『Sustainability Report 2010』

## 野村

社内で非常に侃々諤々(かんかんがくがく)議論しました。CSRレポートにするか、サステナビリティレポートにするか。やはり視点を考えるときに、CSRレポートという言い方をすると、企業側から自分の会社はこうやっていますよという、どちらかと言うと自我が先に出てしまう。われわれ編集部で思ったのは、お客様の関心事も、世の中の関心事も、**地球や社会のサステナビリティ**の方だろうなど。世の中の持続性とか、社会をどうやっていくか。世の中みんな考えなきゃいけないサステナビリティに対して、富士ゼロックスは何ができるのかという、その視点で書こうということになりました。

われわれもサステナビリティレポートを9月に出し、今ちょうど勉強会を始めているのですが、何のために出しているのかという視点の話をまずしています。



## 第2部 建築を通じた地域社会とひととの関わり ～CSRの視点を含めて～



(ダイアログに先立ち、「地域社会との関わり」について竹中工務店よりプレゼンテーションが行われました。)

### 多田

では、今のプレゼンテーションを足掛かりに、地域社会における竹中の役割はどうしたらもっと生きて来るのかとか、人づくりの問題とか、いろいろな意見ををお願いします。

### 諏訪

行政の人はずいぶんみんなと一緒にいろいろやりたいなと思っています。まちをつくっていこう、まちの中でみんな生きていこうとするには、大きな力を持っている竹中さんみたいな所と一緒にできれば、大変心強い。なので、**もっと誘ってください**。「こんな、やりたいんだけど」と言っていたら、「じゃあ、一緒にこういう形で取り組みができるね」という合意ですとか、相談みたいなことは十分できると思います。

### 松隈

例えば「100人の上野」という展覧会。あれは、実は100人の一般の方に「写ルンです」を渡して、1日かけて、7月31日に上野の写真撮ったものを全部展示しています。1人39枚ずつですから、3千何百枚という数の上野を登場させています。あのイベントについては、台東区観光課と上野観光連盟さんにも後援いただいています。みんなで展覧会をやって、いい所を探すといったイベントも考えられます。われわれは建築のプロですが、そういうプロがきっかけづくりをする、ということが求められているのかなと思います。



GALLERY A4 (ギャラリー エークワッド)  
「100人の上野」展



## 野村

先日採択されたISO26000(組織の社会的責任国際ガイダンス規格)でも、企業のコミュニティ参画及び開発を中核主題に挙げています。当社の例を挙げますと、六本木でサムスンさんと一緒に清掃活動をしているのですが、一社だけでなく二社集まると、周りからも賛同され、町内会の人も来てくれたりします。

また、工場のある南足柄市で、「Kids' ISOプログラム」という子ども向けの環境教育とかやっているのですが、南足柄市でISO14000を取得している会社に、環境コミュニケーションの一環として、一緒にやりましょうとお誘いしました。うちにとって良かったのは十数社に参加してもらうことで、市内全小学校の5年生にこのプログラムを実施してもらうことができるようになったことです。またお誘いした会社さんからは感謝され、市長さんから表彰状を直接もらえるようになったというようなこともあります。

多分、企業連携は割とやりやすいのだと思います。そういうところから進めるとコミュニティ参画、開発というところにつながるのではないかなと思います。



## 木村

スウェーデン在住の日本人の方から伺った話ですけれども、ストックホルムには行政と市民と企業が、地区開発に対して同じベクトルを向いて取り組むプラットフォームがあるそうです。ハマービー・ショースタッドという地区があり、かつては町工場で占められていて、非常に土壌汚染もきつかったそうですが、90年代からの再開発で、大変住みやすいエコシティに変わり、日本からも数多く、視察に訪れているそうです。

ここでは、90年代当時より環境負荷を半分にするという目標が掲げられていて、例えば車を使わないようにするのにトラムが整備されていたり、住民の方が使用するエネルギーの半分を、ごみ発電や下水汚泥からのバイオガス等でまかない、1,000世帯分の燃料を供給しているそうです。

御社としていろいろな場所、日本を越えて海外でも地域開発をなさっていくと思います。その際にぜひ、地域全体で2050年にどういった姿を目指すのかということでも、イニシアティブを取っていただくよう期待します。

## 岡田

かつて御堂筋は、大阪を代表する活気あふれるまち並みでしたが、今はまったく元気がなくなってきています。そこで関西の財界や行政を中心として、御堂筋ネットワークというのを立ち上げ、弊社は事務局をしています。御堂筋を活性化させる、その中でいかに自然と共生していくかという活動をしています。御堂筋に川を造るといったアイデアもあり、実現するかどうかはまだ難しいですが、大阪を活性化していこうという想いは強く持っています。地方行政と一緒に、かつ国にも参加頂いて活動の輪を拡げています。また、名古屋では今、蝶を指標とした生物多様性保全のお手伝いをしています。いかにしてまちが自然と共生するかというテーマで、企業や商店街の人々と一緒になって取り組んでいます。



スウェーデン スtockホルム  
ハマービー・ショースタッド地区  
(写真提供:筒井英雄氏)



名古屋 蝶の飛ぶまちプロジェクト



## 堀越

名古屋の話が出ましたが、今度NPOの人たちを中心に、「まちづくりマニフェスト」というのを作るんです。この地域をどういうふうにしようということで、地域の住民の人たちが集まり、企業の人たちが参加して、勉強会みたいなをしています。その中で出てきた成果を自治体に持って行ってマニフェストにしよう。

それと同じように、新しい建物を造るときに、「建築マニフェスト」というのを作り公開してはどうかと思っています。もし公開できれば住民の方々との距離感がぐっと縮まると思います。その際、緑のカーテンを作ったりすると、外の人たちとのコミュニケーションが取れるのですが、樹種は地元産で、かつできれば変わったものがないですね。私は、「ひょうたんを作れ」と言っています。緑を植えるにしても、地元のものをきちんと探して植えていく、また特色を持たせることも必要かなと思います。



## ひとり、ひととの関わり

### 野村

コミュニティへの参画はボランティア的な発想からすると、社員がやろうと思わなきゃいけないし、会社がやらせるものじゃないという意見もあります。当社でも昔から結構、やりたいという人はたくさんいたのですが、今、忙しくなって、これだけ不景気になって、社員がそういうことを会社に期待するのをあきらめかけているときに、会社がおせっかいというか、従業員に対してもう少し踏み込んで、「もっと地域の課題を知りなさい。そしてその解決に貢献しなさい」という一石を投じる必要があると思っています。

別の表現では「脱・内向き社員」です。私の経験で言うと、優秀な人はこれにすぐ共感します。言うことが難しければというか、立派であればあるほど共感する社員がいます。そうすると、当社の省エネ技術もそうですが、やりぬくのです。消費電力を半分にし、出カスピードは倍に上げるというような一見不可能に見えることが、技術のまさにイノベーションが起きて出てしまうのです。みんなが「あの会社は立派だ」と思うようなコミットを経営がして、それに社員が共感して、行動して、そして市民社会が評価していくということが、非常に重要じゃないかと思っています。

そして、それを企業でどうやって展開していくのか。それには価値観の共有と仕組みの構築が重要です。欧米の企業はこの2つをととも重視します。日本人は、これプラス人の育成を必ず入れません。われわれも中国でCSR調達をやるときに、この2つだけでなく、人の育成をいれて推進しています。ここの大切さは、御社のいただいた資料の端々に載っていますので、しっかりとやっていていただきたいと思っています。





## 諏訪

ボランティアをやりたい人が、やる場所をつくることができるというのは、竹中さんのような建物を造ったりする、その土地を改変したりすることができる方ならではだと思います。コミュニティ参画に繋がるモノづくり、建物づくりはどのようなものなのか、考えてみてください。

あとは**屋敷林づくり**です。今、東京の西の方では、屋敷林がどんどん減っていて、屋敷林をばっさりなくしてマンションを建てることがあります。御社が携わる企業緑地等がこれからの新たな形での屋敷林の形となることを期待します。森と一緒に生きる、住む。そういう考え方、コンセプトを作ってほしいと思います。

## 堀越

先ほどの環境学習、環境教育の話ですが、今も屋敷林の話が出ましたが、そういうのは、子どもたちが直接触れられたり植えたりできますよね。そういうのは必要で、建築もそうですが、**子どもたちが触れることができる現場**が欲しいなと思っています。昔、1日中、大工仕事を眺めていたということがよくあります。これが子どもたちにとっていい。そういう機会をつくっていただくと、子どもたちと会社との交流も図れるのかなと思います。

## 三輪

私たちはほとんどがB to B(Business to Businessの略)です。しかしこの生き物の分野は、かなりB to C(Business to Consumer/ Customerの略)であり、生物多様性の非常に大事な部分だと思います。

現在、名古屋城と大きな都市公園の間に挟まれる地域で、実際に蝶を呼び込めるような緑地のあり方を研究しています。約1年たちますが、いろんな取り組みに繋がってきています。つい先日ですが、地域の人たちで植樹の活動を行いました。これによって、広小路通というのは、蝶を呼び込むということをコンセプトにした地域環境づくりが始まったと考えられます。ビルの周りのちょっとした緑地で、五感を刺激するような体験を与えることで、子どもの自然体験というのでも深まる可能性があります。

## 諏訪

スパイラルアップから一緒にというのがあります。一緒につくる未来というのは、**共利共生**の未来。これは生き物の言葉ですが。お互いみんな、相手方も自分も**win-winの関係(互いに成長発展が出来る関係)**の共生、一緒に生きるというのが大事です。また、「地域への貢献」という言葉がよく出てきますが、**教わるというのも貢献**です。地元とか近所の人と密にお話ししてみてください。お話ししたいなと思っているのは、行政なども同じです。



上: 広小路中央商店街の人たちによる植樹風景  
下: 蝶を呼び込むため、蝶が好む植物に植え替えられた花壇。





### 小平

子育てをするようになってから、今までの3分の2の時間で同じ業務をこなさなければならなくなりました。でも、その環境に追い込まれてみると、やらざるを得ないというのが現状で、逆に大きな原動力にもなりました。

今回のダイアログでは、お客様はじめ地域の方々を含めたみんなに、作品づくりで「こういうことをやりたい」という志を共有して頂くこと、そしてみんなのベクトルを同じ方向に向けて協力していただくということが、私たちにはいつでも求められているということを、強く再認識しました。

## 従業員の満足度を高める

### 木村

人づくりというお話ですが、最近、「プロボノ」という言葉が知られるようになってきました。For goodのラテン語の意味で、組織の中で培った専門性を活かして、地域やNGOなどをサポートするというワークスタイルです。一部の外資系の企業では、社員に対してプロボノする時間を義務付けていまして、それを人事評価の中にも採り入れているということも聞いております。今、チャレンジが始まっているような領域かと思います。

あとは、竹中さんが、さまざまな、素晴らしい建築に携わってこられたというのを、もっとPRなさって良いのではないかと思います。

CSRコミュニケーションということ考えた時、謙譲は美德ではないということをもっと意識していただきたい。また、皆さんが骨格として立てられたコンセプトを、具体例を交えてどしどし発信していくというのを、ご提案させていただきます。

最後になりますが、CSRレポートなのかサステナビリティレポートなのかという話も前段のほうでありましたけれども、竹中さんはesレポートということでおっしゃっていますね。環境、Environment、社会、Societyですけれども、この両面を、企業としてどのような形で極めていくのか、高めていくのかということが、ES、従業員の満足 (Employees Satisfaction) にもつながっていくのではないかと思います。

### 堀越

WHO(世界保健機関)の健康の定義で、「身体的に、精神的に、だけではなくて、社会的に良い状態」とあります。建物でも、企業であっても、社会的な部分は非常に大事なもので、それを忘れてはいけないなと思いました。

ブランドというのは、ある意味で顧客との約束だということになりますので、顧客を、市民や未来の子どもにどう広げるかということかなと思います。いい建物は長い間かけて価値が出てくると思いますが、それを子どもたちに伝えていくことで、次の世代に広がっていきます。しかも環境という基軸をきちんと持っているということが大事なかなと思います。



『竹中esレポート 2010』

## 多田

本日は大変活発な議論が出来たと感じます。私はコメントする立場ではありませんが、あえて申し上げれば**マテリアリティ**です。ISO26000の中にもこの言葉がありますが、会社にとって本質的に重要なことは何なのかということ、どんな媒体であっても伝えるべきだろうと思いますのと、**紙媒体と電子媒体の使い分け**みたいなのは、今後ますます、特にグローバルな情報発信の意味では、重要になってくるのかなと思います。



### 【第7回ステークホルダー・ダイアログを開催して】

皆様からさまざまな提言を頂き、ホワイトボードに掲示されています。あの言葉の1つ1つに、私たちにとって非常に重要な、考えなければならないテーマが入っていると思います。本日のダイアログを通じて、今までのビジネスはB to Bに偏っていたのかと感じます。やはり環境ということ、社会と共生していくことを考える上では、B to CのCは、消費者個人だけではなく、コミュニティとも捉え、考えていくことが大切になってきています。一方、私たちのBIにしても、その中にC、従業員個人がいます。また協力会社さんが沢山います。その方々とどう共生して、どうお互いが満足していくかということを考えていかなければなりません。私たちには「建築を通じて社会に貢献する」という理念があります。その中で、いかにして人と自然、人と人をつないでいくか、会社としての方向性を明確にし、しっかりと具現化していきたいと思います。



常務執行役員 岡田正徳

■堀越哲美(ほりこし てつみ) 名古屋工業大学大学院工学研究科  
産業戦略工学専攻教授/都市環境デザイナー

1950年東京生まれ。北海道大学卒業、東京工業大学大学院修了後、日本国有鉄道で設計活動に携わる。豊橋技術科学大学助手、大阪市立大学講師を経て、名古屋工業大学大学院産業戦略工学専攻および建築デザイン工学科教授、現在に至る。この間カナダ国立研究所特別研究員。1993年日本建築学会賞受賞。著書に「絵とき自然と住まいの環境」彰国社など



『絵とき 自然と住まいの環境』  
堀越哲美著 彰国社

■野村浩一(のむら こういち) 富士ゼロックス株式会社  
CSR 部企画グループグループ長

立命館大学文学部史学科東洋史学専攻卒業。富士ゼロックス株式会社入社後、営業を経て、広報宣伝部でTVCMや新聞広告の企画、制作などの宣伝業務を担当。2003年4月より現職。CSR戦略や中期計画やその実行計画の立案、社内外に浸透させるためのコミュニケーション計画などの立案・展開を通じて、富士ゼロックスならびに関連会社のCSRの強化を推進している。サステナビリティ日本フォーラム運営委員。グローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワーク経営委員会委員。



「グローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワーク」ホームページ

■諏訪正晃(すわ まさあき) 江東区役所土木部  
水辺と緑の課職員

1985年生まれ。江東区亀戸に生まれ育ち、中学高校と生物部に所属しその興味を深める。東京工科大学バイオニクス学部で水生生物を使用した水質改善の研究に取り組む。卒業後江東区役所に入庁し、都市緑化、生物多様性行政に携わり、建築に係わる江東区の緑化状況、区民と協働した生物多様性の保全に詳しい。ほか、ユニバーサルデザインハンドブックの編集委員など務める。現在、「生物多様性チーム江東」に所属し区役所と市民団体との橋渡しの役目を努める。バイオニクス学士、日本造園学会会員。



「生物多様性チーム江東」ブログ

■木村麻紀(きむら まき) ビジネス情報誌『オルタナ』副編集長、  
ジャーナリスト

時事通信社記者を経てフリー。環境と健康を重視したライフスタイルを指すLOHASについて、ジャーナリストとしては初めて日本の媒体で本格的に取り上げ、地球環境の持続可能性を重視したビジネスやライフスタイルを分野横断的に取材し続けている。2004年度フルブライトジャーナリストプログラムにて、米コロンビア大学経営大学院客員研究員を務める。ドイツ・ミュンヘン、米ニューヨークでのジャーナリスト活動を経て、2006年秋に帰国。



環境とCSRと「志」のビジネス情報誌  
『alterna 21』

■多田博之(ただ ひろゆき) NGOジャパン・フォー・サステナビリティ  
共同代表(ファシリテーター)

NGOジャパン・フォー・サステナビリティの共同代表として、「持続可能な日本のビジョンと指標をつくるプロジェクト」を推進。環境省、経済産業省委員多数を歴任。大阪大学サステナビリティ・サイエンス研究機構特任。東北大学大学院環境科学研究科環境政策技術マネジメントコース特任教授。